

白金霞

十二月



平成25年12月発行 第34号

白金葭定例会案内

一月十七日(金) 12:00 ~ 15:00 (アビスタ第三学習室) 兼題: 新年一般

二月二十一日(金) 12:00 ~ 15:00 (アビスタ第三学習室) 兼題: 春の日、蝶

三月二十一日(金) 12:00 ~ 15:00 (アビスタ第五学習室) 兼題: 春の水、鱈

新年一般の参考句 (二月十七日分)

恵方道人より先に犬がゆく
諸共に寿ぐ老の福茶かな
芝居見に妻出してやる女正月
歌留多とる皆美しく負けまじく
元日の日があたりをり土不踏
元日の開くと灯る冷蔵庫
おのづから俳は人なりこそことし
去年今年以心伝心の妻とある
愛と云ふ一字に盡きて去年今年
袂をぬけ出て只の年男
年玉は学費の一部苦学子へ
生きてゐる顔がうつすら薺粥
億万の民に母あり薺粥
不精にて年賀を略す他意あらず
初電車待つといつもの位置に立つ
女坂箱根駅伝男坂

茂田慶花
磯田みどり
志摩芳次郎
高濱虚子
石田波郷
池田澄子
加藤郁平
野原晃山
蛭海停雲子
白井幸子
寿々木昌次郎
吉田成子
森田智子
高濱虚子
岡本眸
久遠順

月例会会報 (13 / 12 / 20 6名欠3 湯たんぼ、葱)

飯田孝三

黄落やカイゼル髭は明治の髭 (鷗外記念館)

湯たんぼや垂乳根滲む夢の中

色ちがひ同じ波形湯たんぼ二つ

葱野蒜送りくれしに訃報くる

湯たんぼやこの足踏みし山や川

増田陽一

日米開戦朝の湯たんぼぬるかりし

梟が湯たんぼ欲りて啼きゐたる

青葱と中の空気と直立す

少年と葱をユリ科に数へけり

視野に崩る彗星と夜の霜柱

増田悦子

湯たんぼのさめてさかな朝雀

湯たんぼのまだ温かく寝てをりぬ

二人には大きすぎたる葱の束

光成高志

湯たんぽにそそぐ湯の口見つめをり

朽葉積む山に八角三重塔

暖炉の火に釣られ入りけりガラスカフェ

胡麻まぶす如く烏の枯木立

檜立てる因達羅大将葱植ゑる(上野に十二神将像を見て)

光 みち

葱刻むこと五十年病みもせず

病院の中ゆく梯子十二月

採血のあと湯たんぽにただ眠る

山眠る生れつつある島ひとつ

吠ゆること忘れし犬と冬籠

吉羽多美子

葱畑客ひとり乗る渡し舟

街灯のひとつ消えゐる師走かな

湯たんぽや幾度家を移りしか

土産物勝手口より花八ツ手

寒牡丹作務衣の僧の高髯

松村幸一

十二月八日パンあり珈琲も

忘れじのぶりきの波の湯婆かな

義士の日や絵本に橋の日本晴

羽子板のお軽買はれて行きにけり

喜びも悲しみも知る葱刻む

浅野正美

したいこと多く残して寒椿

西日さす座敷奥まで冬うらら

湯たんぽの丁度良き場所ぬくぬくと

黒々と土盛り上げて葱の列

風邪に効くきざみ葱巻き幼き日

青木啓泰

豊かなる根つこの付いた葱届く

刻み葱たつぷり入れて蕎麦の湯気

ほとんどが青みの葱でモツの碗

ぐじゅぐじゅと目玉がゆるむ日向ぼこ

柚子風呂で丹後の国を考える

選句結果（数字は入選数 左添書きは添削句）

3	羽子板のお軽買はれて行きにけり	幸一	1	朽葉積む山に八角三重塔	高志
3	日米開戦朝の湯たんぽぬるからじ	陽一	1	湯たんぽのさめてさかな朝雀	悦子
3	吠ゆること忘れし犬と冬籠	みち	1	山眠る生れつつある島ひとつ	悦子
2	葱刻むこと五十年病みもせず	〃	1	二人には大きすぎたる葱の束	陽一
2	少年と葱をユリ科に数へけり	陽一	1	梟が湯たんぽ欲りて啼きぬたる	正美
2	十二月八日パンあり珈琲も	幸一	1	西日さす座敷奥まで冬うらら	みち
2	忘れじのぶりきの波の湯婆かな	〃	1	病院の中ゆく梯子十二月	正美
2	湯たんぽにそそぐ湯の口見つめをり	高志	1	したいこと多く残して寒椿	多美子
2	湯たんぽや幾度家を移りしか	幸一	1	葱畑や客ひとり乗る渡し舟	多美子
2	義土の日や絵本に橋の日本晴	多美子	1	葱畑や客ひとり乗る渡し舟	孝三
2	採血のあと湯たんぽにただ眠る	幸一	1	黄落やカイゼル髭は明治の髭（鷗外記念館）	孝三
2	青葱と中の空気と直立す	みち	1	ぐじゅぐじゅと目玉がゆるむ日向ぼこ	啓泰
2	湯たんぽやこの足踏みし山や河	陽一	1	槍立てる因達羅大将葱植ゑる（王野に土神将像を見て）	高志
2	湯たんぽやこの足踏みし山や川	孝三	1	街灯のひとつ消えゐる師走かな	多美子
2	黒々と土盛り上げて葱の列	正美	1	柚子風呂で丹後の国を考える	啓泰
2	視野に崩る彗星と夜の霜柱	陽一	1	湯たんぽや垂乳根滲む夢ン中	孝三
2	胡麻まぶす如く烏の枯木立	高志	1	色ちがひ同じ波形湯たんぽ二つ	〃
1	湯たんぽのまだ温かく寝てをりぬ	悦子	1	ほとんどが青みの葱でモツの碗	啓泰
1	喜びも悲しみも知る葱刻む	幸一	1	湯たんぽの丁度良き場所ぬくぬくと	正美
1	豊かなる根つこの付きし葱届く	啓泰	1	暖炉の火に釣られ入りけりガラスカフェ	高志
1	豊かなる根つこの付いた葱届く	啓泰	1	土産物勝手口より花八ツ手	多美子
			1	刻み葱たつぷり入れて蕎麦の湯気	啓泰
			1	寒牡丹作務衣の僧の高簾	多美子

葱野蒜送りくれしに計報くる

風邪に効くきざみ葱巻き幼き日

孝三

正美

一句鑑賞

光成高志

羽子板のお軽買はれて行きにけり

幸一

お軽は萱野勘平の妻の名である。浄瑠璃の「仮名手本忠臣蔵」(二七四八)の中で夫の用金調達のために身を祇園の力楼に売ることになっている。現代では、羽子板のお軽となつてやつぱり買われて行ってしまうのだなあ、あはれお軽は、という感慨が詠われている。後ろに元禄快筆録の世界が広がっている。ほんとは、萱野三平重実には妻はなく、忠と孝の間で窮して自ら命を絶った武士であつた。虚実の中にもものあはれと諧謔が漂っている。軽みに通ずる佳句と思います。(重実は俳号を涓泉と称した。けだし高子葉らと同じく沾徳が門である。幸一さん！お軽を通じて重実を悼んでいるとは何と奥ゆかしい。)

青葱と中の空気と直立す

陽一

葱の旬の頃、盛んな青葉はちきれんばかりに膨らみ直立している。下総にはこのような青々とした葱畑がどこでもよく見られる。膨らんだ青葱の中になるほど空気が充滿しているのであり、葉に囲まれて直立しているのだ。「突き抜けて天上の紺曼珠沙華」(誓子)の句と同様に、季語の本意を言い当てた佳句と思います。

湯たんぽや幾度家に移りしか

多美子

「湯たんぽや」と切字ではねあげ、そういえば幾度家移つて今ここに、またあの湯たんぽと共に生活していることだなあ、ああハレ。あの時はあの家で、又あそこでは、子を産んで、家族が増えてとかなんとか「思い出してごらん」と湯たんぽに語りかけている多美子さん。

一句鑑賞

飯田孝三

葱畑客ひとり乗る渡し舟

多美子

矢切の渡しがすぐ目に浮んだ。が、他のどこでもいい。まさに、今では減つてしまつた渡し場の風景である。「客ひとり」の点描がポイント。よつて、景が目飛び込んでくるのだ。臍である。一目瞭然。はて、その先に何を視、思いを何に馳せるのだろう。読み手も、又、乗る「客」に、それぞれ自分の投影を見るかもしれない。写生だけの句ではないのである。

十二月八日パンあり珈琲も

幸一

長引く景気の低迷にも拘わらず、日本ほど食物の豊富な国はないだろう。居ながらに、世界各地のとりどりの食物を口にすることができる。パン、珈琲などは日常茶飯の最たるものだ。ふと気づけば、今日は十二月八日、六十九年前、日米の戦争(世に大東亜戦争と称し、また太平洋戦争とも言われる)が始まつた日である。以後、戦中戦

後、パン・珈琲どころか、米、麦、野菜始め食料一切、各種物資の極端な窮乏を久しくした。パンや珈琲が、日頃、庶民の口に入るようになったのは、敗戦後十年も経てからだろうか。さまざまに思いが脳裏に去来するのである。止め「も」の軽いタツチがいい。仮に珈琲「あり」だと俳句らしくなく、重くれ、嫌味が覗くだろう。

青葱と中の空氣と直立す

陽一

葱はユリ科の多年草で、日頃身近だが、『日本書紀』にも出てくるほど古い野菜、総丈三四〇センチほどに真直ぐ伸びる。青葱は白い茎の上、緑葉の部分、筒形で中空、その先端に晩春花を咲かせる。葱坊主である。関東では白葱が好まれ、畝高に土を積み育てる。関西は葉葱嗜好でそうはしない。ご託宣が長過ぎたが、掲句に目を瞠つた。青葱が直立なら、中の空氣もその筈、ほんとだ。驚いたのは道理にじやない。それをすつとばした詩的眞実を呆氣羅漢とつきつけられ、啞然としたのである。感覺鋭く知的、且つ又、俳諧が滲む。言いつ放しの知らん顔ぶりが憎い。單刀直入、結「直立す」の外連なさがいい。一句のリズムの弾みがそれを引き立てる。葱は眼前の列で勿論いいが、時空を遡り、記紀万葉の畑に空氣を突っ立てていたと思えば、なお面白い。「少年と葱をユリ科に数へけり」も、鋭い生理感覺をもって、独自ニックである。白葱だろう。結、数へ「けり」が水際立ち、情韻交響し

て妙。手許の大歳時記でも、両句ともに、古句、現代句を通じ類想、等類を見ない。

二人には大きすぎたる葱の束

悦子

湯たんぽのまだ温かく寝てをりぬ

悦子

視たまま、思うままを述べる。普段のことばに心がやどる。俳句はその器。両句は今さら、それに気づかせてくれる。前句、俳句で「二人」は夫婦。誰もが身に覚えがあるだろう。寝てをり「ぬ」の収めが秀逸。湯たんぽの余温に朝方またまどろむ、そして、ふつと覺めて、それに気づく。そのあたりの阿吽の微妙が句の勘所である。

柚子風呂で丹後の国を考える

啓泰

柚子と丹後の関わりが分からず、句会では、惹かれながらパスした。終って何人の方も同じだったと伺った。帰って早速妻に同地生まれの友だちに聞いて貰ったところ、丹後は寒いので、柑橘類は育たない、たわわの柚子を見た覚えはない、幼い頃の柚子湯の記憶もない。楽しかったのは、お友だちを呼んだ雛祭だったとのこと。さて、困った。温かい柚子の香に浸りながら、遠く故郷丹後の寒さを思うのだろうか。啓泰さんは、地元のご出身ではないのかな。「思ふ」ならぬ「考える」が気にかかる。丹後の国との関わりは如何にと、考えさせるのである。

吠ゆること忘れし犬と冬籠

みち

ほのぼの、ふわふわの犬の抱き心地は、「冬籠」りの氣

分そのもの。ふーむ、むべむべ。ところで、この頃は、番犬は異端、留守番させりや、夕暮れは遠吠えする始末。凡そ世は、お座敷犬のペットを抱き競うばかり。とはいえ炎天下、ダックスフントにちゃんちゃんこ着せて、石の舗道を引き歩くなんてのは、狂気の沙汰。動物愛護協会に急報したくなる。ついつい余談がすぎました。犬を抱く素肌感覚で、冬籠りの雰囲気をとらえて妙。当世諷刺の気も籠るだろうか。仮名を送らぬ「冬籠」が、冬ごもりの氣息を丸ごと伝えてくれるのである。

(平・25・12・22)

一句鑑賞

松村幸一

湯たんぽやこの足踏みし山や川

孝三

ある年齢に達した人の、湯たんぽに足を預けながらの来し方の回想句。山や川は実際の山や川であるとともに又人生の山や川。湯たんぽというまことに軽小な目用家庭の具が俳句の世界で置かれようによつては人の一生の喩に転化する大きな存在となる。さりげなく添えられた「この足」の「この」に無量の感慨が宿る。読み手の一人一人が所有しているにちがいない「この足」であり、「山や川」である。

湯たんぽにそそぐ湯の口見つめをり

高志

この一句の中で、作者は病臥の人となつている。湯た

んぽに湯をそそぐ人は、奥さんか身内の誰かであろう。自分にとつても大事な人が今身を傾けて湯をそそいでくれている。病臥の人はその手元を云い尽くせぬ感謝の思いで見つめている。苦勞をかけている、済まない、癒えた暁には十分にお返しするからネ、と言葉を呑みこんでじつと見つめている。そういう光景が見えてくる。その感動が読み手に伝わってくる以上、一句がかつての日の回想でもよく、全くフィクションな創作であつても問うところではない。

湯たんぽのさめてさかな朝雀

悦子

湯たんぽには境涯を託した佳句が多い。しかしこの句は境涯詠に伴う負のかげりをとどめない。いっそ湯たんぽはさめ果てることでそれを使用した人の、今日これらの一日を励ますかのような。にぎやかな雀の祝福の歌が、これに和す。一句の中にS音が五つもはさまれていることが、一層弾んだ倍音のリズムを奏でる。こういう晴れ晴れとした湯たんぽの句もあるのだった。

病院の中ゆく梯子十二月

みち

こういうこともあるのだろう。何で担架ならぬ梯子が入るのか、何処かへかがれて何ををするのか、読者は分からない。その時病院に居た大方の人の眼にも、当事者以外は分かるまい。好奇や不審や診療待ちの屈託と無聊の眼差しなどに見守られながら、梯子は通り過ぎて行

くのである。読み手もこの時正に病院に居る。十二月という時ならぬ季語が、何とこの不調和な光景に見合っていることだろう。この季節意外だったらこの一句のはらむ事件性は他愛なく消え、トリビアルな意外感だけで終る。

少年と葱をユリ科に数へけり

陽一

広辞苑でユリ科の項目を開けると「単子葉植物の一種。種子植物中で最も大きな科の一。世界の熱帯から寒帯、高山に至るまで分布し約三百属五千種。」云々とある。その「果実は蒴果または液果。ユリ・ネギ・サルトリイバラ・チューリップなど。」とある中に、作者は少年を組みこもうとする意表外の挙に出た。何で少年と葱なのであるう？つよい香りを抱えこんだシンプルな清潔さ、ういういしさ、直情、含羞、連想をひろげてゆけば限りなく、どうやら危険な官能の匂いさえ伴ってくる。魔法をかけたら葱と少年とは互いに入れ替り得るかもしれない。ぼくは昔、川端康成の「少年」という同性愛小説を人目にはかるようにして溺れて読んだ経験を思い出した。あるいはもつと遡つて、江戸川乱歩の明智小五郎探偵が鐘愛してやまなかつた紅顔豊頬の美少年小林芳雄君を。ひよつとしてぼくはこの一句にとんでもない詠み違いを犯しているのかもしれないが、人の心の秘められた暗渠を流れるせせらぎの忍び音を、ふと聞きとめた気分になった

ことを記しておきたい。

したいこと多く残して寒椿

正美

ぼくはこれを作者自身の（多分年の瀬の）心懐と受け取った。それなら残してより残りての方が、表現として正確と考えた。あとで言えば亡くなられた御主人を思つての句とのこと。なるほどそれなら句が別段と深みを加える。多分庭先なのであろう沢山の深沈たる寒椿の姿容が、切なく暇に迫る。たしかに「残して」とあるべきだが、と恥じた。改めて訂正したい。但し言い訳になるが、卒読のかぎりでは自詠という解釈も成り立とう。ここは「悼」あるいは「亡夫」という前書が欲しい。読み手との疎通が表現者の遂の志であるなら、一見冷たい前書という手だても場合によっては欠かせないのではあるまいか。

一句鑑賞 vi (33号分)

武者昭七

柄ごと落つ風のいたづら朴落葉

みち

台風のあとなど枝ごとへし折られて散乱している葉っぱの無残な姿を見ることがよくある。柄ごと地面に散り乱れた落ち葉を「風のいたづら」とおどけて見せたところにユーモアとやさしさがにじんでいる。一句を一気に詠みくださずに三句構えに組みあげたのもすつきりして明るく軽快なリズムを生んだように思う。

雪の富士車窓に故郷近づけり

多美子

旅の車窓に次々に移っていく風景はそれを見る僕らの胸にさまざまな思いをかきたてる。詠者は雪の富士を車窓に見つけて「ああ、ふるさとが近づいた」と実感したのである。そのこみあげてくる安堵感と懐かしさとがゆったりとした句のリズムに生きている。反対に「ひとり車窓に目醒むれば／まだ上州の山は見えずや」（氷島）と激しい口調で叫んだのは荻原朔太郎であった。

朴落葉いちまい渡る谷の空

幸一

散り落ちていた朴の葉が折からの谷風に追いついてられ舞い上がり大海に漕ぎだした小舟のように身をもみながら渡っていくのである。深い谷と谷の上の大きく開けた空という雄大な景色と、そこをひらひらと渡っていく朴の葉の小ささと三者三様の対照が見事にとらえられている。硬い漢字表記に挟まれた「いちまい」という平仮名表記が風に揺られて谷を渡る落葉の揺れ動くさまを想像させる。

頃合を見て発つ鴉の黒さかな

啓泰

拙宅の隣家の庭にヤマモモの大木があり、時折鴉がやって来てはしばし枝を渡り歩いたあと、首を前に突出し姿勢を整え一呼吸おいてさつと飛び出すのを時々目にする。掲句を拝見してなるほど「頃合を見て」という飛び出しようがあるものだと感じ入った。ひよつとして何事

も「頃合い」というものはあるのかもしれませんが。それにしても鴉という鳥はどうしてあんなに黒いのでしょうか。その黒さとつややかさ。思わずみとれてしまうこともあります。結句にもそれが感じとれます。

鑑賞と邂逅のいきさつ（33号）

飯田孝三

逢ふも遇ひたり命八ツ林檎哉

高志

思いがけぬ出会いの驚きと悦びである。その主は、高志さん・みちさんご夫妻とわれら夫婦、さる11月4日、長野電鉄別所線車内でのこと。ご夫妻は、佐久平、塩田平を周遊、別所温泉泊の帰途、こちらからはからずも同温泉郷泊の帰り、偶々息子家族四人も一緒、いつの間にか結婚五十年、初めて皆で出かけた帰りである。塩田駅発車寸前の電車に、ご夫妻が乗り込まれたのである。三車輻輳の真中中央部。まさかと思ったが、間違いない。思わず声をかけ合い奇遇にびっくり。ご夫妻は前山寺、無言館を巡られ、シャトルバスが駅に早く着いたため、帰りの新幹線は一便繰り上げの帰路。小生らは北向観音参詣、現地昼飯を取り止めて、始発駅の駆け込み乗車である。かくしてばったり。されば何たる奇遇、いや奇縁。「命」は、土芳との二十年ぶりの再会の感激を詠む、芭蕉「命二ツの中に生きたる桜哉」をふまえ、西行「命なりけりさやの中山」と遠く響き合う。互いに命を愛しみ、

生を喜ぶのである。命「八つ」は、邂逅八人。末広がり
のめでたさは金婚の祝意を重ねる。さて、林檎は囁目、
ご存知信濃の名産。年寄は、ふと戦後の「リングの唄」
を思い、はたまた「まだあげ初めし前髪の／林檎のもと
に見えしとき／」（藤村「初恋」）の昔を思い巡らす。光
る紅は命の輝きを思わせる。林檎は、わが国近代文芸の
黎明を象徴、覚醒、復活を暗示し、めでたい。片や俳諧
の秋果の王、柿では一向に句に坐らない。因みに西洋の
創世記によれば、林檎はこの世の命の起りぞな。

冒頭「逢ふ」はおもいがけなくばったり、「遇ふ」は運
良くひょっこり出会う。用字周到、知を秘め、祝意をこ
められる。感謝々々。止め「哉」がはつきり林檎の果実
を目に見せる。心籠る、手練の一句である。七六五の破
調も逢遇のびつくりさに通じて面白い。俳句は言わず深
い、仲間是有り難い。（平25・12・11）

（邂逅という言葉を使われたので、昔読んだ本を引っ張り出し
て再読した。それは、亀井勝一郎の「愛の無常について」の一節
である。「人生にはさまざまのふしぎがありますが、私は考え、迷
い、一念形成の途上における邂逅を最も重視するのです。いつい
かなるとき、いかなる偶然によって、誰と出会ったか。そこでど
んな影響をうけ、どんな友情が、あるいは恋愛が成立したか。そ
ういう経験をもつ人は、ふりかえって運命のふしぎに驚くであり
ましょう。・」と書いている。先に外山慈比古名誉教授の「セレ

ンデビイテイ」も読書による邂逅を示唆したのだろう。科学的に
は単にそれは偶然だという。科学的に説明できないものは、偶然
だという。これが間違いない。運命なのだ。人知の及ばない鬼神の思
し召しなのだ。こう思うことにしている。今回もそう。故萍々子
さんと山手線内で二回遇った。これは気持ち悪いと言われてしま
ったが、この時は、運命まで感じられなかったから、そうおっし
やったのだろう。高志記

ハガキ句三十五報（08／4／7）

眉刺の青き祖母めて桃源郷	孝三
桃ひらく黄泉平坂尿もらす	〃
線香にほむら立ちたりお中日	妙子
春宵や待たされてゐて待つてゐる	〃
三月の朝を掃きをり竹箒	三穂
白梅の影は鏡花の女めく	たか子
花むしろ正座の小さき蹠見ゆ	かほる
巣作りの鴉が剥がす棕櫚の皮	敏子
うららかや唇揺るる久留里線	〃

たんぽぽや三菱さんは何百社

高志

搗いて搗いてやうやく混じる蓬餅

〃

ハガキ句三十五報管見

巢作りの鴉が剥がす棕櫚の皮

飯田孝三

敏子

鴉シリーズ第三弾。作者は村の鴉と昵懇である。時、あたかも産卵の季節。雌鳥たちは巢作りくり余念がない。(雄も手伝うのかな)都会の猛者たちは、なんと、針金製のハンガーで巢を組み立てる。(何? 人間の住処だつて、鉄筋、鉄骨入いり)そりや、ひとも鳥も天然のやさしさに包まれないよ。母さんの子守唄を聞きながら。棕櫚の皮は鳥の営巣になにより。ご先祖の昔から、そうしてきたんだもん。まあいい目をした、いい子が育つに違いない。棕櫚皮の剥ぎとりに勤しむ親鳥の挙動が、一々目に見えるようだ。巧まず、抜けて、ほのぼのと俳諧味がこぼれる。作者ならではの吟。

たんぽぽや三菱さんは何百社

高志

参った。「たんぽぽや」が決まる。「三菱さん」との照応が憎い。殊に、〃「さん」の抜けつぷりが見事。又、「何百社」がたんぽぽの咲く様に通い、えも言えぬ。合点。三菱を花に喩えるなら、なるほど、たんぽぽだ。明るく、面白く、知的である。ふところが深い。ダイヤの社章の変更を進言したくなる。次は、三井、住友の社章

変更の発案をお願いしたい。

搗いて搗いてやうやく混じる蓬餅

高志

はた、と膝打つ思いだ。蓬餅を搗いたり、見たりした者なら、皆、そうだろう。餅搗きは、その前に杵で粗捏ねしてから搗く(搗き慣れない者は、この段階でへばる)のだが、蒸し上げた飯粒が餅になるまで搗き込むのは、なかなか大変。ましてや蓬餅である。蓬葉の繊維が飯に馴染み、滑々、艶やかでふくらかな餅になるまでに搗き上げるのは、実に、容易ではない。ふつうなら、上五中七がくどいが、ここでは違う。ずばり、句のいのちである。就中、「やうやく」が真髓。(ただし、だてに真似ると悲惨)

蓬餅には、父祖伝来の民族の魂が籠り、文化の息吹きを伝えるのだ。勿論、この頃もつばらの、人工の染め餅では、こうはゆかぬ。

三月の朝を掃きをり竹箒

三穂

「三月の朝」と「竹箒」の取合せの微妙が勘所。「をり」が臍。引き絞りが利き、調べのよろしさと相剋、快。Sa N Ga Tu No a Sa o Ha Ki o Ri Ta Ke Bo Ho Ki。地面を掃く箒の音が聞こる。

(駄句近作) 二月、従姉逝く。享年九十九歳(二句)。逝きにける花辛夷未だ翔けざるを

うから寄り白寿の花を天上で
入園の青アムブレラ足が生え
園児らに四日つづきの花の雨
すつぽりと桜つむじに園児達

(平20・5・31)

お便り広場 (到着順、敬称略)

前略 今年も米作りをしました。一反ほど残り一反余は小作に出して作つてもろうています。300m²ほど畑にして野菜を作っています。作物の性質で一度に大きくなり食べきれず田圃の肥料になる分も多くあります。一反余でも私と娘では食べきれません。少しですが送ります。食べて下さい。昔ながらの稲架乾燥でゆつくりぼちぼちと行つて終らせました。来年はそろそろ引退しようかと考えています。何も気を使わないで下さい。また正月が来ます。良い年を迎えられるよう祈っています。あまり良いニュースはありません。私は元気です。

一人すみ明日の計画メモに書きハッハッハ

葉も落ちて柿の実ばかりぶらさがり (駄目か) 草々

(平25・11・26 榎田健三)

拝復 「白金葎」第33号を拝受拝読。ご〇〇も有難く拝読。お陰様にて十二月一日(日)に退院です。「柿食うて正倉院の戸籍かな」(啓泰) この句に注目。大宝二年(西暦七〇二)今から一二二一年も昔の戸籍が残っている由。

この戸籍の人々の子孫は継続していると四二―三世代のはず。子孫の人たちはどこでどうなっているのでしょうか。中国の陶淵明さんの子孫は今も「陶」姓で同一地区に沢山居住している由の文献を読んだことを連想。この「白金葎」の作品も一〇〇〇年も一三〇〇年も後世まで残ることを想像すると空想は拡大し、楽しくなります。「ビル多き佃島にも路の臺」(高志) 高層ビルと路の臺の取り合わせ、人工と自然の対比と路や雑草が勝ちビルは老朽化して廃墟となる日がこないことを祈りたくありません。感謝して一筆御礼まで。奥様共々のご健康を祈り申しあげます。

(11/28 (木) 敬白 河村博巨)

今年は縁あつて貴誌に拙文を掲載する機会に恵まれ大変嬉しい年になりました。有難く存じております。編集氏のご健康と貴誌の一層の発展をお祈りいたします。

(H25・12・1 武者昭七)

白金葎11月号頂きました。益々の充実振りに圧倒されています。戸田建設のOB会には欠席しました。11月29日は残念でした。長屋璃子さんから小沢昭一著「俳句で綴る変哲半生記」頂きました。しつかりしなさいとのことです。元氣を出してガンバリます。我孫子日記、編集後記を愛読しています。益々の御活躍を祈ります。

(12・1 小山陽也)

光成様 寒くなりました。ご自愛下さい。「柿食つて正

倉院の戸籍かな」の精緻な解説評言誠に正當かつ大本道の慧眼に恐れ入るばかりです。こういう批評眼が正道でしょう。但し倉に古戸籍の存在を知らずして、御物（内部）を包含して「戸籍」とこの句に付いて視た評言もあり、これ又その詩眼にも頭がさがります。私も大宝二年の戸籍（戸籍の存在は察知しておるも）とは知らなんだ。ありがとうございました。（H. 25・12・15 青木啓泰）（お礼と年末の思い）

先日の例会ではお世話になりました。楽しいひと時でした。又々、銀杏を頂戴しました。ご夫妻の細やかなお心遣い有り難うございます。

銀杏や素焼殻爆ぜ翡翠の玉

別所温泉の出会いもあり、今年は感慨深い一年でした。吟行も、恒例の蓮見舟の外、吉見百穴には都合つきませんでした。丸の内、千駄木界限とたいへんお世話になりました。丸の内では、陽也さんにお世話になりました。いずれも、常連の外の方々のご参加で賑やかでした。誌面の充実では、昭七兄の寄稿が特筆されるでしょう。これから、皆さんに幅広く、句会参加、寄稿いただければと思います。啓泰さんには、お目にかかれませんでした。が、来年が楽しみです。『白金葎』がここまで来られたのは、偏に夫妻のご尽力によります。感謝するばかりです。何卒、来年もよろしく願いあげます。どうぞよいお年を。

（平 25・12・22 飯田孝三）

スペースが余りすぎそうとお困りの様子を伺い、義を見てせざるは勇なきなりと妄文を呟きました。穴埋めのお役に絶てば幸い（もし逆に今度はハミ出して、お困りだったら、・）さて今年ももう数日。来年も又孝三先生を中心に「稲妻」論争のつづきをして、わがあきつしまをパツと照らし出すことに致しましょう。どうぞよいお年を。 高志さま 幸一拝（25・12・22 朝）

受贈誌（十二月号）

鰯のぼり来る佃島渡し跡（飛行雲 69号） 駿河岳水

銀座行く人名月を誰も見ず（Ⅱ） 〃

琅玕の珠ぞ二日の露の臺（彩 114号） 平野ひろし

冬籠鉄瓶の水煮ゆる音（Ⅱ） 〃

一株に生姜五つの力（Ⅱ） 小泉 博

石畳ちぐはぐ敷かる秋暑かな（あすか 12月号） 山尾かづひろ

こだま（俳誌交換主宰選句）

飛行雲夏号（69号） 駿河岳水主宰抽出

飛行船の影に入りたる花野中（30号） 飯田孝三

鰯雲治らぬ人を見舞ひきて（31号） 吉羽多美子

彩十一月（113号） 平野ひろし主宰抽出

先つぽに花を残して胡麻実る（31号） 光成高志

潮風の堂に吹き込む日蓮忌 (32号)

俳窓評論纂

〃

*「あすか」11月号は創刊50周年通巻500号の記念号であり、名取思郷創刊主宰の百句が青山澄男氏の抄出で掲載され、大竹多可志氏の「夢と現実のはざまに」という題名で創刊主宰の小論が載っている。山尾かづひろさんがこの二代目の野木桃花主宰の元で活躍されている。この小論の中で、思郷さんの俳句論を紹介されている。中に、結局俳句は、物のあわれを詠むものという一文に注目した。芭蕉の「おもしろうてやがて悲しき鞆舟かな」の「やがて悲しき」の诗情こそが俳句である。思郷俳句は、物のあわれ、即物非情の詩、虚と実の間を目指す、余情・余韻の句として左の句を挙げている。

手袋でいたはる運の向く手相

面影の母の細見の花擬宝珠

焚火に尻ならべて同期大差なし

ふるさとの顔皺ばかり山眠る

あたふたと電柱の蟬過密都市

著者は「かびれ」(大竹孤愁主宰)の重鎮であるが、「俳句は実感で詠むもの」と思っているとして、実感とは刹那に感覚的に発生する個々の思いであり、「自然の一部である人間とそれを取り巻く自然が融合する時に醸成され

る季感(情緒)そのものであり、それが詩的生命現象として誕生する季感詩俳句なのである」と書かれてある。いずれも私の考えと同じであるが、結果としての俳句は、もっと即物非情である。

手袋の十本の指を深く組めり

誓子(S10)

燃え盛る焚火の臓腑真赤なり

高志(H8)

蟬鳴かす電柱橋の際に立ち

誓子(S19)

蝶のうた

武者昭七

長い人生にはさまざまな思い出がまつわりついている。楽しい思い出、つらい思い出、いまだに悔いの消えなぬ思い出……。ひとつひとつが懐かしく時にはせつない。それは故郷を遠く離れた旅人が故郷に寄せる思いに似ていよう。だからそれをいま「郷愁」と呼んでみる。

夕映えに

夕映えの雲が記憶の細道を

郷愁をつれてもどつてくる

けれど わたしの郷愁よ

おまえの住みかは

もうここには

ないのだから せめて

このきらびやかな夕映えの光りのなかを

鳥のように高くとぶがいい

蝶のように軽く舞うがいい

夕映えのひとつ時はこんなにも明るいんだから

不意に三次達治が「蝶のやうな私の郷愁!・・・」(測量船)と詠っているのを思い出した。少年の頃あこがれた詩人であった。少年はあんなふうに詠いたいと不遜な思いを抱いたものだった。いまは遠い昔である。

鳥や蝶のように虚空をひらひらと舞う生き物を古代の人々は浮遊する人間の魂情念と見たてて畏れたという。和泉式部は群れ飛ぶ沢のほたるを男にむかつて我が身からあくがれ出る魂とみた。達治がみた郷愁の蝶とは海の広さにも似た舟のふところであつたらしい。

(2013・11・29)

貴船で歌った和泉式部の歌(編集子補注)

物おもへば沢の蛍も我が身よりあくがれいづる魂^{たま}かとぞみる

我孫子日記

11/15 例会。11/20 S O A。11/21* 久寺家中。11/23* 千駄木根津。11/27 S O A。11/29^{3*} 同上吟行句会。12/2 青戸。12/4 S O A。12/8^{4*} 真栄寺。12/13^{5*} 別所温泉。12/20 例会。

* 農夫来て曲げて見てをり干大根

給食の一品切干煮られみて

2* 牡蠣殻を店の表に団子坂

金柑生る三間離れ夏蜜柑

高志

3* 根津権現隨身門まで落葉掻き

〃

S 字坂そして丁字路冬黄葉

みち

^{4*} 津波後老女生きてあり死なぬ

兜太

長寿の母うんこのやうに吾を産み

〃

夏の山国母めて吾をよたと呼ぶ

〃

十二月金子兜太と握手せり

みち

白金霞兜太に献ず十二月

高志

^{5*} 大楳の腹より炎珈琲店

〃

天長の太き桂の冬木なる

みち

悴みて唱ふ南無釈迦牟尼佛

〃

こつこつと杖引きのぼる冬の磴

高志

林檎貰ふ落葉も入れて貰ひけり

〃

編集後記

例会で言い足りなかったことなどを帰途のコピアンで懇談している。恒例になっている。先に鷗外吟行会では二次会の句会を行った。ここではそこまではやらないが、古今の俳句俳人の名が出てくる。私は記憶力が鈍ってきたので、気にかかるところはメモしている。

今回の話の中で、句集手賀沼(平8)の選者は金子兜太、飯島晴子と申しあげたが、後者は誤り、ここで訂正します。坂巻純子(沖同人)である。何故飯島晴子の名が出てきたのか分からない。飯島晴子は「藍布一反かな

かな山からとりに来る」のような前衛句を作る孝三さん、幸一さん（？）お気に入りの方流俳人である。

蕪村の辞世句「白梅に明^あくる夜ばかりとなりにけり」についての飯田龍太の評言が良い。松村月溪の短冊が金福寺に懸っていた。「稻妻や浪もてゆへる秋津しま」は、鳥瞰か、どこかの山上からの瞩目から想像力を働かせた句とか孝三さんの熱弁の途中でお開きになった。

この途中只今孝三さんのFAXが届きました。大変ご丁寧な思いの一文を頂きました。毎月の言葉に毎回恐れ入っております。十三頁の孝三さんの思いは私の思いでもあります。句会、吟行句会を通して俳句文芸を愛し信じ楽しみたいと思っておりますので、どうか、投句、参加、寄稿、手紙などを頂けるようにお願い申しあげます。来年も大過なく元気に俳句生活が出来ますよう皆様の健康共々お祈り致します。

ここまで後記を書いておりましたが、更に翌日、幸一さんから鑑賞文が届きました。お二人に編集のご心配をお掛けいたしました。おたいた原稿は全部載せ、旬にかかわらない文章を翌月以後に回しました。本誌は選句選評に力点を置いています。今月号が本来の白金菫であります。私のパソコン席が本誌の発行所でありますので、下にありのまま写真を掲載しました。Vサインは私の癖であります。どうか皆様によき年が巡って来ますよ

うお祈り致しまして今年の締めとします。

白金菫 第34号 平成25年12月発行
編集・発行人 光成高志 (FAX 04-7187-1068)
発行所〒270-1119 我孫子市南新木2-14-17
表紙の題字：加納綾女。写真は白金菫



発行所と発行人